

225. 滋賀県のナイフ形石器

1. はじめに

県下における旧石器の報告例は極めて少なく、縄紋時代の尖頭器等を含めてもわずかに過ぎない。これらの石器を紹介した初期のものに『近江栗太郎志』^①や『近江愛智郡志』^②の有舌尖頭器があるが、いずれも現在は所在不明となっている。また、島田貞彦氏が『有史以前の近江』^③において蒲生郡竜王町（旧鏡山村）山面字高塚で寺本婉雅氏が採取された有舌尖頭器を紹介されている。1970年四手井晴子氏によって「滋賀県の有舌尖頭器他」と題して、県下発見の有舌尖頭器5例と近江八幡市宮ヶ浜湖底出土の木葉形尖頭器、さらに唯一のナイフ形石器として大津市田上里町大字滝ヶ谷出土の1点を紹介された^④。1980年代各市町村史の再編に伴い先の石器とともにいくつかの新資料が紹介される。それでも1983年刊行の『八日市市史』の集成^⑤では19遺跡27点にすぎず、大半は湖東地域と大津市南部の丘陵部に偏っている。また、ここに紹介された資料にも再び所在不明となっているものがある。

ここでは、従来の資料とあわせ県下のナイフ形石器を中心に紹介し、今後発見が予想される地域や石器群にかかわる若干の問題に触れ、滋賀県における旧石器研究の契機となることを願うものである。

2. 洪積段丘と旧石器の発見地

滋賀県は周囲を山地で遮断された盆地で、琵琶湖を含む近江盆地と中小の丘陵からなる特有の地勢をなしている。もとより沖積地は花崗岩が地表付近でマサ化したバイラン土壌に起因して河川沖積作用が著しく、沖積地での旧石器検出を妨げてきた大きな要因であることは言うまでもない。また湖西・湖北地域は洪積段丘の発達が少なく、湖底段丘も深いため、旧石器の検出が困難である。これに対して湖東・湖南では湖底から尖頭器や剝片が採集されており、旧石器時代末期には湖面も今より大きく後退していたことが明らかである。その後内湖の発達に見られるように水位も上昇し、水辺はより生活地に適した環境下に移っていく。ボーリング調査によるAT（姶良丹沢火山灰）層は、沖積地下約10mという結果もみられるが^⑥、逆にAT層下

以降に急速な堆積作用が進んだとみることができ、低位段丘面とその直下の扇状地では、比較的浅くAT層がみられ、旧石器が検出される可能性が高い。野洲町辻町の大塚山古墳北地点では、GL-2.06mの黒色土層が放射性炭素によるC¹⁴年代測定で10,100±120B.P年、更にその下層GL-2.97mで12,900±145B.P年という測定結果も得られている^⑦。

a) 小堤丘陵とその周辺

野洲町小堤に位置する小堤丘陵からは、昭和61年度の圃場整備に先立つ小堤遺跡の調査で国府型ナイフ形石器(3)が採取され^⑧、また国道8号線を隔てた平成2年度調査の大篠原西遺跡でも搔器や横長剝片などの石器(1・2)が採取されている。両者はともに小堤丘陵先端部の遺跡で、丘陵から流出した土砂に混って採取されている。

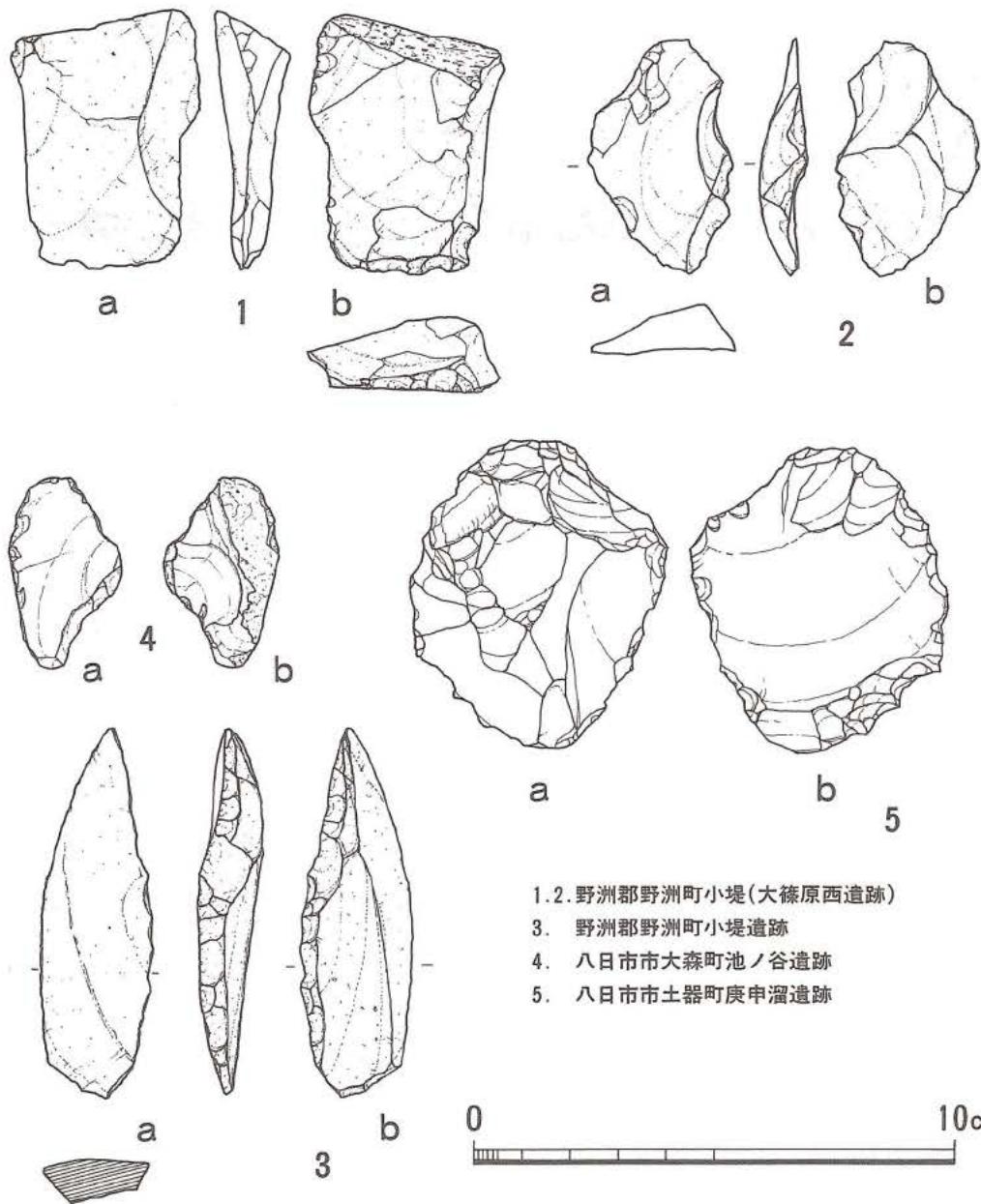
また、小堤丘陵からやや距離を隔てた野洲町大篠原の向山（夕日ヶ丘）からも小型のナイフ形石器^⑨が、さらに野洲町富波遺跡からも石刃状剝片を素材とし、縁辺を二次加工した小型の尖頭器が採集されている。

3はサヌカイト製の国府型ナイフ形石器で、乳白色に著しく風化して転磨痕をとどめる。底面が基部に至るほど幅狭で薄く、もとより翼状剝片の一端が尖った扁平な素材を用いていることがわかる。すべてa面の主要剝離面側からb面側の一側縁にプランティングを施し、先端の尖ったナイフ形石器に仕上げている。全長7.7cm、幅2.4cm、厚さ1.2cm。

2はチャート製の横長剝片で、a面は大きな主要剝離面を残す。b面はネガティブな3枚の剝離痕からなり、山形の打面を形成した後、横長の剝片を剥ぎ取っている。剝離角113度、長さ4.9cm、幅3.0cm、厚さ1.0cm。

1は自然面を残す不整形な剝片を素材とする搔器。a面は古い2枚のネガティブな面でb面は左上の剝離痕を切って打瘤が顯著なポジティブな面からなり、自然面と対向する一側縁をa面側から粗い調整加工によって刃部をかたちづくっている。長さ5.3cm、幅4.0cm、厚さ1.6cmを測り、石材はサヌカイト。

10はサヌカイトの小型横長剝片を素材に一側縁を加工し、断面三角形のナイフ形石器に仕上げている。調整加工は主としてa面の主要剝離面側から剝離されているが、一部b面側からも剝離された対向調整剝離がみられる。型式的にみて国府型ナイフに後出するもの



1.2. 野洲郡野洲町小堤(大篠原西遺跡)

3. 野洲郡野洲町小堤遺跡

4. 八日市市大森町池ノ谷遺跡

5. 八日市市土器町庚申溜遺跡

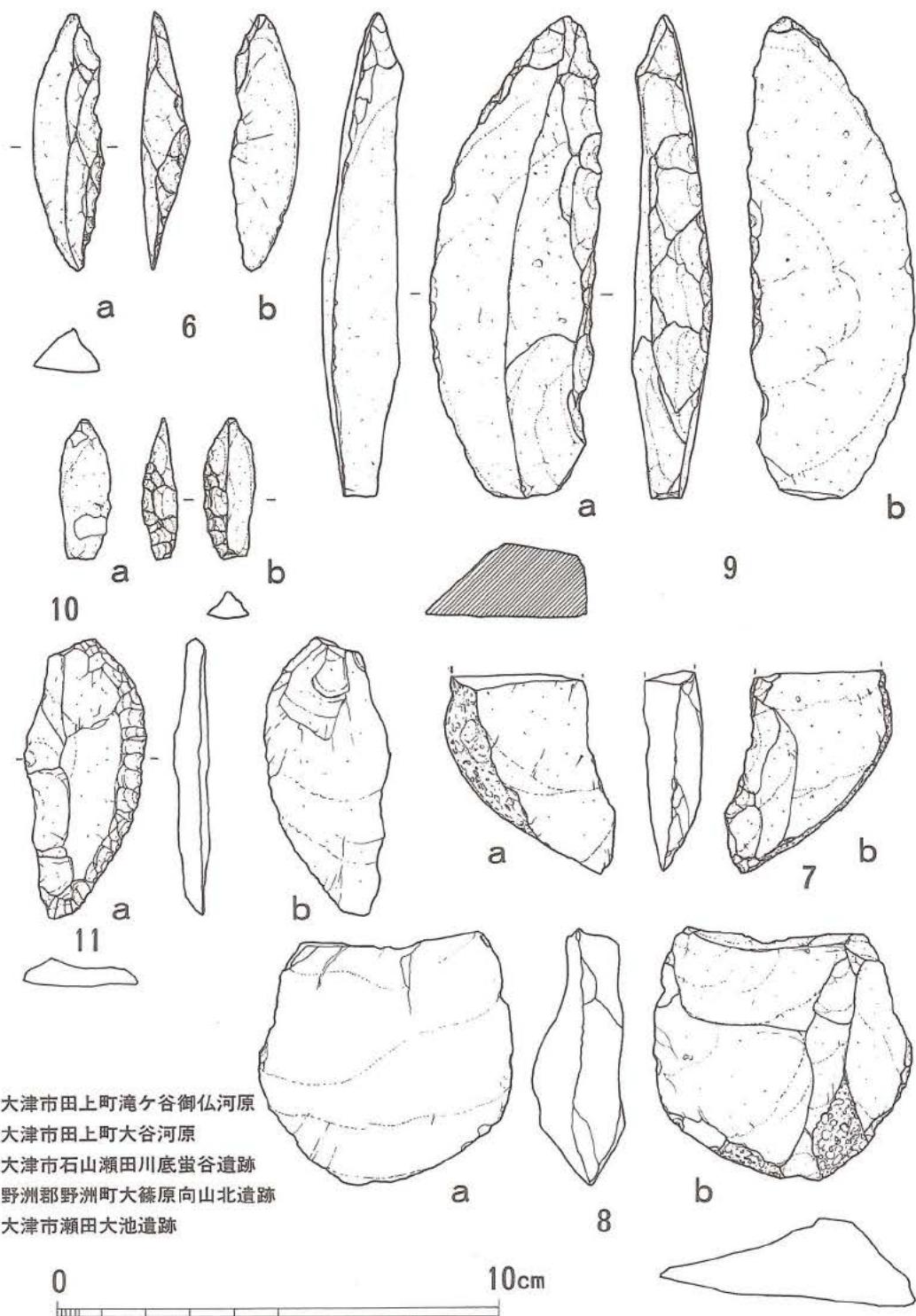
である。長さ3.3cm、幅1.2cm、さ0.8cm。

b) 瀬田・田上丘陵

田上で各種の鉱物を採集し、田上鉱物博物館を設立された中司氏によって鉱物資料とともに、4点の石器が保管されている。内訳はナイフ形石器、削器、剝片、有舌尖頭器で、従来はこの内ナイフ形石器と有舌尖頭器が紹介されている。しかし他の2点については、何故かまったく触れられておらず、今回ナイフ形石器と併せて紹介したい。また、瀬田の大池からは、横長剝片と削器^[1]が、螢谷遺跡からは瀬田川浚渫工事に伴う調査で、縄文時代早期末の土層に混入して大型の国

府型ナイフ形石器がみつかっている^[2]。

6は田上里町大字滝ヶ谷御仏ヶ原で採集された横長剝片を素材とするナイフ形石器である。打面部は打瘤が完全に除去されており、断面形も三角形となり、素材の変形度が大きい。調整剝離は一側縁にb面の主要剝離面から数回の剝離によって施されているが、やや鈍角な加撃によって蝶番状にえぐれている。a面には底面が観察され、翼状剝片を素材とした可能性も考慮されるが、第一次調整の際の2枚の剝離痕がみられることから即断できない。良質のサスカイトを使用し、風化色は灰白色を呈する。全長5.8cm、幅1.1cm、厚さ



1.0cm。

7はナイフ形石器と同じ地点で採取された削器である。上半を折損するが、本来は半月形をなしていたものと考えられる。大型の縦長剥片を素材とし、a面がネガティブな面、b面が平滑なポジティブ面で構成される。片側縁には自然面をとどめ、b面左側縁部にa面側からの調整剝離によって薄い刃部をつくり出している。良質のサヌカイトを使用し、風化色は青灰色を呈する。全長4.5cm、幅3.3cm、厚さ1.3cm。

8は田上町大谷河原採集の五角形状を呈する剝片で、a面はポジティブ面からなる主要剝離面で、b面は一部に自然面を残すネガティブ面からなる。このことから自然面を除去するように周囲から数枚の剝片を剝離し、石核から剝離した後、打面部を除去して五角形状に整形したと考えられる。自然面が海綿状をなす良質のサヌカイトを用い風化色は淡青灰色をなし、やや新しい感がある。全長5.8cm、幅5.8cm、厚さ1.3cm。

11は瀬田大池の採集品で、他にもう一点剝片がある。a面中央の剝離痕はネガティブな面で、b面に打瘤が頗著な主要剝離面を残す。a面左側縁部に残る古い剝離痕は、先のネガティブ面を剝離した打面調整痕とみられるが、何故か90度打面を転移して縦長の剝片を剥ぎ取り、削器に仕上げている。全長6.3cm、幅2.7cm、厚さ0.8cm。

c) 八日市・布引丘陵

湖東丘陵では2枚の低位丘面があり、いずれも河床礫から成り立っている。石器は大谷嚴氏によって段丘をのぞむ斜面や渴水期の溜池で採集された。資料には横長剝片や板状剝片、尖頭器などがあり、ここでは2例の剝片を再録しておく。

4は八日市市土器町で採集されたチャート製の剝片で、b面はいずれもネガティブな面からなり、自然面を3枚の剝離痕によって除去した後、山形に打面を形成し小型の横長剝片を剥ぎ取っている。自然面には筋状の亀裂があり、粗いチャートを素材とする。剝離角127度。全長3.9cm、幅2.3cm、厚さ0.8cm。

5はチャート製で石核から縦長剝片を剝離したのち、主要剝離面側から主としてA面側の打面部の整形が試みられているが、満足のいく剝片を得られなかつたため放棄されたものであろう。全長6.4cm、幅5.3cm、厚さ1.3cm。今回図示できなかつたが、八日市市小脇町太郎坊山（赤神山）山腹からは黒曜石製の剝片が採集されており、また八日市市布施町の溜から山田弘平氏によって風化の進んだサヌカイト製の板状剝片が採集されている。石器素材が板状剝片というかたちで当該地に搬入された可能性が考慮される。

3. 今後の展望

県下のナイフ形石器を中心に最も発見の可能性が高

い地域の資料を紹介したが、詳細を論ずるほど資料が見当らないのが現状である。この中にあってサヌカイトを石材とする国府型ナイフ形石器とそのバリエーションの範疇に属するナイフ形石器の存在が指摘でき、これらには搔器や削器を伴うようである。またこれに続く小型のナイフ形石器もみとめられた。

剝片生産技術の面では、八日市市土器町や野洲町大篠原西から見つかった横長剝片が、いずれも片面2～3枚のネガティブ面で構成され、その後主要剝離面側から山形に打面を整形し、横長剝片を剝離している。またこれがチャートにも併用されていることは、当該地域の1つの特徴とみられるかもしれない。

石材では大津市唐橋遺跡縄紋早期の断面三角錐に硬質頁岩を用いたものがあり、また黒曜石剝片等もみられるが極めて希で、大半は小さな凹凸のある海綿状の自然面をなすサヌカイトで、これに3割程度粗悪なチャートを用いている感がある。

近年段丘上にも多くの宅地開発や工業団地の造成が進みつつある。速やかに低位段丘やその直下の扇状地での詳細な調査が急がれる。紙数の都合により他の石器については、別の機会に紹介することとしたい。

（進藤 武）

註

- ① 『近江栗太郡志』巻壱之壱 滋賀県栗太郡教育会 1919
- ② 『近江愛智郡志』 滋賀県愛智郡教育会 1929
- ③ 島田貞彦「有史以前の近江」（『滋賀県史蹟調査報告』第1冊 1928）
- ④ 四手井晴子「滋賀県の有舌尖頭器他」（『古代文化』第22巻第3号 勝古代学協会 1970）
- ⑤ 丸山竜平「原始社会の生成」（『八日市市史』第1巻 1983）
- ⑥ 植村善博ほか『琵琶湖その自然と社会』 サンブライト出版 1983ほか
- ⑦ 勝日本アイソトープ協会測定、辻広志氏の御教示による。
- ⑧ 杉本源造「小堤遺跡」（『昭和61年度野洲町内遺跡発掘調査概要』野洲町教育委員会 1987）
- ⑨ 濱 修ほか『笛谷遺跡・石山遺跡』 滋賀県教育委員会・勝滋賀県文化財保護協会 1992
- ⑩ 註文献5参照
- ⑪ 県下の旧石器から縄紋時代の石器を紹介したものとして上記以外に中井均・中川和哉「滋賀県米原町出土の石器」（『旧石器考古学』39 1989）、角上寿行「滋賀県の旧石器についての一考察」（『滋賀考古』第4号 1990）、森 隆「野洲町出土の石器資料」（『滋賀文化財だより』No.198 勝滋賀県文化財保護協会 1994）などがある。